平成26年度「福井新々元気宣言」推進に係る施策の実施結果
（平成27年3月末現在）

「福井新々元気宣言」の４つのビジョンを着実に実現していくため、平成２６年４月に掲げた施策・事業の実施結果について、次のとおり報告します。

平成２７年３月

教育長　　林　雅則

Ⅰ　総括

１　福井型１８年教育の推進

・　幼児教育については、５歳児の遊びを通じた学びと小学１年生の学習を連続して捉え、「学びに向かう力」を育成する「保幼小接続カリキュラム」を全国で初めて策定するとともに、「家庭教育相談・応援サイト」を新たに開設して、先輩ママパパの体験談など様々な子育て情報を提供しました。

・　小・中学校教育については、小中学校の接続を重視する教育を進め、今年も全国トップレベルの学力を維持し、特に、古典教育では、小学生向けに百人一首カード、中学生向けに故事成語や論語カードを作成し、全小中学校で授業に活用しました。また、芸術教育では、新たに、日本画を活用した美術教育を小中高の推進校２２校で開始し、小中学校の弦楽器推進校を２校拡大しました。

・　英語教育については、すべての小学４年生が、独自教材を活用して海外の文化や習慣を学習しながら、英語の発音の特徴や日本語との語順の違いなどを学ぶとともに、全中学校でラジオ語学番組を活用して、教科書にこだわらず新しい語句や表現を学習しました。高校では、会話やプレゼンテーションなど、生徒が「話す」「聞く」時間を増やし、使える英語教育を推進しました。

・　高校教育については、高校生が、福井の将来を考え、自分の果たす役割や、今、何を学ぶべきかを考える機会とするため、本県ゆかりの企業経営者等１１人が先生となり、県内１３高校において授業を行い、延べ１，３６０人の高校生が受講しました。

・　大学進学指導については、高校教員が協力して、「個別大学入試対策学習アドバイス集」を作成し、「高校生受験応援サイト」に掲載するなど、指導力の向上を図りました。

・　職業教育については、生徒が企業で長期実習を行うとともに、外部講師が難関資格取得の指導を行うなど、実践的な職業教育を進めました。また、坂井高校の工業実習棟テクノラボが完成したほか、奥越明成高校の奥越の観光ＰＲへの取組みなど、地域と連携した取組みを進めました。

２　福井の教育のステージアップ、教育力向上

・　本県で初めての併設型公立中高一貫教育校となる県立高志中学校の平成２７年４月開校に向けて、学校説明会や中高一貫教育についてのセミナーを開催し、入学者選抜検査を行い、第１期生として９０人を決定しました。

・　スマート教育を推進する高校にタブレット等を導入して、家庭学習と授業との接続を改善するなど、ＩＣＴ機能を活用した新しい授業の研究を始めました。

・　授業名人等の模範授業を撮影したＤＶＤを授業研究会や初任者研修等で活用するとともに、各高校で「若手教員授業力向上塾」を開催するなど、若手教員の授業力向上に努めました。

・　新書「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」の発刊と併せて、１０月に「福井教育フォーラム」を開催し、本県を教育視察に訪れる人が年間２，０００名を超えるなど、「福井の教育」を全国に発信したほか、高知県や茨城県など６県から８人の教員が１年間県内で研修し、日本の教育センターとしての機能を高めました。

３　国体に向けた競技力の向上

・　平成３０年の「福井しあわせ元気国体」に向け、トップレベルの指導者から直接指導を受ける実践指導や高校の重点強化校等への優秀な強化コーチの配置、優秀な専門トレーナーの招聘など個々の選手強化に努め、長崎国体では１７位を獲得しました。

・　全国で初めて、スポーツ選手の県内就職を支援する「スポジョブふくい」を立ち上げ、２６競技に４８名（男２７名、女２１名）を、「チームふくい」のメンバーとして確保しました。

・　福井国体の競技会場となる施設の整備について、福井運動公園の県営体育館や陸上競技場、漕艇場、クレー射撃場の改築、改修工事に着手しました。

４　ふるさと文学館開館

・　本県ゆかりの作家に関する直筆原稿、映像・音声など作家の実像に触れ、親しむことのできる貴重資料の展示や若手作家と交流できる文学サロンなど、県民が文学に親しめる企画などを実施し、幅広い世代に文学への関心を高めていただく機会を提供する「福井県ふるさと文学館」を、平成２７年２月に開館しました。

Ⅱ　「政策合意」項目にかかる結果について

・別紙「平成２６年度　施策項目にかかる実施結果報告（教育庁）」のとおり

平成26年度　施策項目にかかる実施結果報告（教育庁）

（平成27年3月末現在）

【実施結果の区分】

・目標を上回って達成しました。（例：成果が目標を概ね2割超えて達成されたもの）
・目標を達成しました。（例：成果が目標どおり達成されたもの）
・目標を一部達成しませんでした。（例：成果の一部が目標に及ばなかったもの）
・目標にはいたりませんでした。（例：成果が目標に及ばなかったもの）
・引き続き実施します。（例：成果を上げるためには年度を超えて実行する必要のあるもの）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
１　日本のモデル「福井の教育」 ◇　夢と希望を育てる学校 〇幼児教育の充実【部局連携】 ・幼児教育支援センターによる訪問指導や、保育士と幼稚園教諭が一緒に学ぶ研修会の開催などにより、童謡、昔ながらの鬼遊び、木のおもちゃなどを活用して、心豊かな人間性を育てる幼児教育の充実を図ります。 ・小学校入学前に、先生の話をじっと聞ける習慣などを身に付ける幼児教育を行い、保育所・幼稚園で知っている歌やことばなどから始める小学１年生教育を進めるための本県独自の保幼小接続カリキュラムづくりを完成して、幼児がスムーズに小学校生活に入れる仕組みを確立します。 ・今年度、新しく「家庭教育相談・応援サイト」を開設して、様々な子育て情報を提供するとともに、３歳児健診など全ての保護者が参加する機会に独自に作成したワークシートを活用し、共働きの親でも手軽に家庭でのしつけなどが学べる仕組みをつくります。	〔成果等〕　目標を達成しました。 幼児教育支援センターの幼児教育アドバイザーによる園への巡回指導（１４４回）、保育士と幼稚園教諭が一緒に学ぶ幼児教育講座（１２回）、家庭教育アドバイザーによる出前家庭教育講座（９６回）により、童謡、昔ながらの鬼遊び、木のおもちゃなどを活用した幼児教育を推進しました。 ５歳児の遊びを通じた学びと１年生の学習を接続する「福井県保幼小接続カリキュラム」について、７月に試行版を作成し、県内全市町における説明会や、保幼小接続講座（２５回）、モデル校による実践公開保育・授業（６回）などを開催しながら、実践事例の充実と県内全域への浸透を図り、３月に完成版を策定しました。 ８月に「家庭教育相談・応援サイト」を新たに開設し、先輩ママパパの体験談など様々な子育て情報を提供するとともに、園の保護者会や３歳児健診などすべての保護者が参加する機会に独自に作成したワークシートを活用し、共働きの親でも手軽に家庭でのしつけなどが学べる講座（６回）を実施しました。
幼児教育アドバイスのための保育所・幼稚園巡回訪問回数　１４０回 （平成２５年度　１３０回） 小学校の指導内容を学ぶ研修会に参加する保育士、幼稚園教諭の数　８５０人 （平成２５年度　８４０人） 家庭教育力向上のための研修会等参加者数　３，１００人 （平成２５年度　２，４９９人）	幼児教育アドバイスのための保育所・幼稚園巡回訪問回数　１４４回 小学校の指導内容を学ぶ研修会に参加する保育士、幼稚園教諭の数　１，９６３人 家庭教育力向上のための研修会等参加者数　３，２３２人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○ふるさと教育・古典教育・芸術教育の推進【部局連携】 ・新たに、福井の偉人の生き方などを学ぶことができる教材づくりや教員の指導方法を研究するとともに、本県ゆかりの企業経営者等を「福井ふるさと教員」として任命し、福井の将来を考える授業などを行い、ふるさと教育を充実します。 ・教員が古典等を多く読み、児童生徒にその魅力を伝えながら、小学校では百人一首、中学校では古典や漢文を取り入れた教育を進め、古くからの日本文化の良さをつなぐ教育の充実を図ります。 ・触れる機会の少ない弦楽器の演奏や、本県が所蔵する「落葉（菱田春草）」に代表される日本画の制作などを通じて、一人ひとりの児童・生徒の芸術的能力を引き出す教育を進めるとともに、童謡・唱歌を活用して四季の情景や日本語、旋律の美しさに対する感性を育てる教育の充実を図ります。	〔成果等〕　目標を達成しました。 中学生、高校生向けに福井の先人の生き方や考え方を学ぶ教材として、橋本左内など１００名の偉人列伝の作成に着手しました。 本県ゆかりの企業経営者等１１人が先生となり、県内１３高校において、将来のエネルギー問題、国際金融の動向、リーダーとしての役割、花や動物を通した環境保全などに関する授業を行いました。（延べ２９回） 小学生向けに百人一首カード、中学生向けに故事成語や論語カードを作成し、全小中学校で、言葉の意味や背景などを楽しんで学べる授業を行うとともに、高校生向けに、冷泉貴実子氏の講演会「和歌に詠まれた四季」を開催するなど、古くからの日本文化の良さをつなぐ教育を進めました。 日本画を活用した美術教育を小中高２２校の推進校で開始し、県立美術館所蔵の「落葉」の鑑賞授業や「落葉」のレプリカを活用した出前授業を６３校で実施しました。また、弦楽器の推進校を２校（朝日小、小浜中）拡大し、小中高合同演奏会や県外の弦楽クラブとの交流を行いました。 童謡・唱歌について、すべての小学校において朝の会や集会等で歌うとともに、由紀さおりさんを招いて「童謡で伝える会」を県内保育所等６箇所で開催し、日本語、旋律の美しさに対する感性を育てる教育を充実しました。
「福井ふるさと教員」による授業受講生徒数　１，０００人 小学３年～中学３年までの国語の授業における百人一首、古典、漢文を活用した授業時間数　１５０時間 （平成２５年度　１３０時間）	「福井ふるさと教員」による授業受講生徒数　１，３６０人 小学３年～中学３年までの国語の授業（１，２２５時間）における百人一首、古典、漢文を活用した授業時間数　１５０時間

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○「白川文字学」を活用した漢字教育の充実 ・本県独自の漢字指導者に認定された教員を中心に、小学校におけるわかりやすい漢字教育や中・高校生の漢字への学習意欲が高まる指導方法、教材開発などに取り組む研究会を活発に行い、小・中・高を通じて白川文字学を活用した漢字教育、国語教育を充実します。 ・昨年、初めて設けた「白川静漢字教育賞」の表彰対象の拡大など内容充実を図るとともに、新たに被表彰者や県内外の漢字教育関係者との「漢字教育ネットワーク」を形成して、新しい漢字教育に関する情報発信を進め、日本の漢字教育を先導します。 漢字教育に関する研究会・研修会の開催　５０回 （平成２５年度　２４回） 全国「漢字教育ネットワーク」参加者数　１８０人	〔成果等〕　目標を達成しました。 小学校においては、漢字指導者に認定された教員を中心に、白川文字学漢字教育への疑問や課題に関するＱ＆Ａを作成し、指導力の向上を図りました。 中学校や高等学校においては、「漢詩」や「論語」の授業で、「漢字教育素材集」を活用した漢字教育を展開しました。 「第２回白川静漢字教育賞」では、国内外（２０都道府県、米国）６４件の応募があり、ホームページ等を通じて全国の教育関係者に優れた教育実践事例を紹介しました。 また、国内有数の国語・漢字研究者等を招聘し、高校での模擬授業を行うほか、教員との意見交換等を行うことでネットワーク形成を図るとともに、台湾国立台北教育大学や立命館大学が主催するシンポジウムにおいて、福井県独自の白川文字学を活用した漢字教育を発信しました。 漢字教育に関する研究会・研修会の開催　５７回 全国「漢字教育ネットワーク」参加者数　２２８人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
〇英語教育の向上 ・高校では、英文和訳中心の授業から、「話す」「聞く」ことを重視した授業に転換するとともに、職業系高校では就職後に役立つ英語が学べる独自の教材を作成するなど、高校卒業後に使える英語力が身に付く教育を行います。 ・中学では、ラジオ語学番組の活用や、高校英語も取り入れたワークシートに基づき、多くの英文を読み込む学習の強化などにより、高校教育につながる英語力の強化を図ります。 ・小学校では、国に先駆けて、昨年、県独自に開発した小学４年生から英語のリズムや抑揚などを学ぶ学習を拡充し、英語が楽しくなる教育を進めます。 ・海外インターンシップや大学等と連携して国際課題研究に取り組むスーパーグローバルハイスクールの指定を受けた高志高校やアソシエイト校の敦賀高校を中心に、将来、国際的に活躍する人材を育てるモデル教育を推進するとともに、国の英語教育強化地域拠点に位置付けられた勝山高校と勝山市の小・中学校において、先導的な小中高一貫した英語教育を進めます。 ・ラジオ英語講座を聴くことなどにより、小学校教員の英語力を高めるとともに、中学・高校の英語教員による専門指導力向上の研究会などを充実するほか、ＡＬＴが生徒と共に「ＦＵＫＵＩ英語ランド」や「イングリッシュ・タウン・ウォーキング」など授業外の活動を行います。 （中学生） 英検３級以上を取得した生徒数 １，４５０人 （平成２５年度　１，４０９人） （高校生） 英検準２級以上を取得した生徒数 １，１００人 （平成２５年度　１，０５５人） うち英検２級以上を取得した生徒数 ３４０人 チャレンジ目標　３５０人 （平成２５年度　３３４人）	〔成果等〕　目標を達成しました。 高校では、授業時間の多くを、会話やプレゼンテーションなどの音声活動を中心に、「話す」「聞く」ことを充実し、センター試験では全国トップのリスニング成績を維持しました。また、職業系の高校生が話せる英語力を身に付けられるよう、オリジナル教材を作成し、新年度からの授業改善に活用していきます。 すべての中学校で、ラジオ語学番組を活用して、教科書にこだわらず新しい語句や表現を学びました。また、高校英語を取り入れた「長文速読ワークシート」を活用し、教科書以外の英文を正確に速く読むトレーニングをしました。 小学校では、すべての小学４年生が、独自教材「グローバルスタディーズ」を活用し、英語の発音の特徴や日本語とは語順が異なることを学びました。 スーパーグローバルハイスクール指定校の高志高校では、大学等との連携授業やタイ・ベトナムへの海外研修、東アジアをテーマにした課題研究を行い、アソシエイト校の敦賀高校ではエネルギーをテーマにした課題研究に取り組みました。 英語教育強化地域に指定された勝山市の小学校では、専科教員と担任がペアを組み、３年生から英語での「聞く」「話す」活動を始め、６年生では文字の読み書きができるようになりました。中学校では、年間のほとんどの授業を英語で行い、高校では、音読を充実し、外国の事情など生徒の関心が高い話題について英語で話し合えるようになりました。 中学・高校のすべての英語教員を対象に、ＮＨＫ語学番組講師等から効果的な指導方法を学ぶ集中研修（３日間）を開催しました。また、授業外活動では、夏季休暇にＡＬＴと英語で生活を送る「英語ランド」に２１６人の小中高生がコミュニケーションを楽しく学び、「イングリッシュ・タウン・ウォーキング」では高校生がＡＬＴに観光地や学校周辺を案内しました。 （中学生） 英検３級以上を取得した生徒数　１，４８５人 （高校生） 英検準２級以上を取得した生徒数　１，１６９人 うち英検２級以上を取得した生徒数　３６７人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
〇サイエンス教育の推進 ・小学校での「夏休み理科実験応援プロジェクト」の実施や中学生を対象とした「夏休み科学実験チャレンジ教室」の開催に加え、今年度から新たに里山里海湖研究所を中心に理科教員が指導力を活かして、理科好きの子どもたちを増やします。 ・本県独自の「ふくい理数グランプリ」などを通じて、中・高校生のサイエンスに対する知的探究心を高め、全国科学オリンピックや「科学の甲子園」など、全国コンテストに参加する生徒数を増やします。 ・南部陽一郎先生など優れた科学者から直接学ぶ機会を多く設けるほか、日本を代表する企業や大学の研究者、エンジニア等による講義や実験など、最先端技術分野を学ぶ機会を広げ、将来の本県や日本の産業を支える人材を育てます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 全小中学校で、発展的な実験や自由研究を支援する「夏休み理科実験応援プロジェクト」を行うとともに、最先端の科学技術に触れる「夏休み科学実験チャレンジ教室」では、科学クラブ等に所属する中学生３００名が参加し、ＤＮＡに関する講義や実験を実施しました。また、里山里海湖研究所と連携して、１５小学校で、メダカやトンボなど身近な生物の観察調査や里山里海湖に関する講座を開催するなど、子どもたちがふるさと福井の自然に親しむ事業を進めました。 「ふくい理数グランプリ」に過去最高の４９２チーム、１，４８５名の中高生が参加したほか、「全国科学オリンピック」に、初めて科学技術高校、福井商業高校等が参加するなど、高いレベルにチャレンジする生徒層が広がりました。 サイエンスに関心のある中高生を対象に、鈴木章北大名誉教授（２０１０年ノーベル化学賞受賞者）や、長谷川壽一東大副学長（動物行動生態学者）による講演を開催しました。 京都大学と連携協定を締結し、最先端の科学技術等について、京大教員による指導等の協力関係を設けました。 理工系大学を志望する普通科系高校１年生（９０名）に対して、福井大学や本県企業で先端技術の知識と技能を学ぶゼミを実施しました。
ふくい理数グランプリの参加者数 １，１５０人 （平成２５年度　１，１４８人） 全国科学オリンピック等の参加者数 ２５０人 （平成２５年度　２３９人） 課題研究発表会の参加者数　２００人 （平成２５年度　１９０人）	ふくい理数グランプリの参加者数　１，４８５人 全国科学オリンピック等の参加者数　２５０人 課題研究発表会の参加者数　２０２人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
〇職業教育の充実 ・今年４月に開校した坂井高校において、最新実習機器を備えた工業実習棟（テクノラボ）を年度内に完成させるほか、奥越明成高校、若狭東高校と共に、総合産業高校として地域と連携した特色ある教育を進めます。 ・企業的園芸農業の現場や、先端技術を導入している製造工場などでの実習を充実するほか、難関資格取得に積極的にチャレンジする指導や３Ｄプリンターなど最先端技術が学べる機器整備を進め、実践的な職業教育を強化します。 ・産業構造の変化に的確に対応した専門性の高い指導が行えるよう外部人材の活用や、教員の企業や試験研究機関への研修派遣を充実します。	〔成果等〕　目標を達成しました。 坂井高校では、レーザー加工機等の最新技術を学べる設備を導入した工業実習棟が１月に完成しました。 奥越明成高校の観光ＰＲへの取組み、若狭東高校の薬草の栽培研究、坂井高校の県立大学生物資源学部と連携した新品種小麦の栽培など、地域と連携した教育を進めました。 企業での長期実習（１０日間）に７７名の生徒が参加し、生産や販売現場での企業レベルの技術を習得しました。 旋盤技能士など就職に有効な国家資格の取得に向けて、１３名の外部講師による指導を行いました。すべての工業系高校に３Ｄプリンターを導入し、操作法を工業技術センター研究員が生徒や教員に指導しました。 ハイブリッド車の整備技術を有する企業技術者など９１名の技術者を講師として高校に招き、生徒と教員がともに先端技術について受講したほか、教員を工作機械メーカーや県外大学に研修派遣し最新の研究や技術を学びました。
国家資格（日商簿記、販売士検定を含む） 取得者数　　延べ２，６５０人 （平成２５年度　２，６３７人）	国家資格（日商簿記、販売士検定を含む）取得者数 延べ２，６７６人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○中高一貫教育の推進 ・高志高校における県内初の併設型中高一貫教育については、中学・高校６年間を見通した弾力的な教育課程を編成し、６月以降に保護者説明会を開催するとともに、１月に入学者選抜を実施して、平成２７年４月に高志中学校を開校します。 ・高志中学・高校において、中高一貫した教育指導ができる教員体制を整えるため、外部人材を活用するほか、他県の中高一貫教育校に派遣して、教員を養成します。 ・金津、丹生、美方の各高校での連携型中高一貫教育については、連携する中学校の拡大や高校教員が出向いての教科指導や進路学習指導を強化して、中学と高校の連携の充実を図ります。	〔成果等〕　目標を達成しました。 県立高志中学校の開校に向けて、７月には県内６か所で学校説明会を実施したほか、１１月には中高一貫教育の内容に関するセミナーを開催しました。入学者選抜検査には県内１１市町および県外から５４５名が受験し、第１期生として９０名を決定しました。 平成２７年４月からの授業開始に向けて、県外の中高一貫教育の先進校に本県教員を派遣し、指導方法の習得を進めたほか、中高一貫教育の先進校の校長などの外部指導者も招き、教員への研修等を行いました。 連携型の中高一貫教育については、高校の教員が中学に出向いて、高校で学ぶ英語、数学、国語の指導を充実するとともに、平成２７年４月からは、連携する中学校を拡大し、地域との協力関係を深めます。
◇　次をめざす教育の充実 **○新たな教育振興基本計画の策定** ・子どもたちが活躍していく国際社会経済情勢が目まぐるしく変化する中、国の教育再生論議が展開され、今後の本県教育を取り巻く環境が大きく変わっていくため、今後の本県教育の進め方を議論し、新たな教育振興基本計画の策定に着手します。	〔成果等〕　目標を達成しました。 平成２６年１１月に教育政策に詳しい大学教授、県内教育関係者等による「福井の教育」向上会議を設け、新たな教育振興基本計画の策定に着手し、福井の教育の現状と今後の課題や学校教育等（幼児教育、小・中・高校教育）について、３回協議しました。また、県内５地区でＰＴＡや地域の方々約１００名との意見交換や、スポーツ・社会教育・学校関係など各分野の方々との協議を行いました。

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○高校教育改革の推進 ・これまでの高校再編等の成果を検証して、今後の高校入学定員の考え方や分校、全日制・定通制のあり方などの検討を進めます。	〔成果等〕　引き続き実施します。 奥越明成高校では観光を授業に取り入れ、奥越の観光資源のＰＲ策に取り組み、若狭東高校では、今後の地域特産化が期待される薬草の栽培研究を行うなど、新たに地域と連携した教育を進めています。また、小浜水産高校を引き継いだ若狭高校海洋科学科では、東京大学との間で東大教員による指導など海洋教育に関する連携協定を締結したほか、県立大学海洋生物資源学部等の地域の協力による海草アマモの定植研究を進めるなど、海洋教育を充実しています。 生徒数全体の減少や、定時制高校において働きながら学ぶ生徒が減少する一方で学び直し等を必要とする生徒の学びの場となっている状況など、今後の状況や新たなニーズに的確に対応する高校教育のあり方について、地域の教育関係者等との協議を始めました。
○教員の資質向上 ・昨年から改めた、小学校や中・高の各教科別の専門性の高い人材を確保する教員採用試験の更なる充実に努めるとともに、本県教員を志望する者に対して、採用後の指導実践力や教員としての素養を高める研修プログラムを提供します。 ・今後の本県教育を担う若手教員の授業力や人間力を高めるため、校種間や地域間を超えた異動を積極的に行うとともに、他県の高い教育効果をあげている学校や、東京事務所、観光、福祉など幅広い行政分野への派遣を行います。 ・今年度から、教育研究所の研修体系を抜本的に見直し、実践的な授業力を育てるロールプレイ形式の研修や学校に出向いての課題解決研修、通信機能を用いた学校や自宅で学べる教科研修などを進め、教員の資質向上を図るとともに、教員自らが主体的に児童生徒に伝えるべき多くの書物を読むことなどに努めます。 （主体的に通信研修等に取り組む教員数　３，０００人 （平成２５年度　２，３２０人））	〔成果等〕　目標を上回って達成しました。 ２２大学に募集活動を行い、教員採用試験では、近県よりも高い５．４倍の倍率の中で、優秀な人材を確保することができました。採用内定者には、教員用の研修および大学・各種機関が実施する研修等の受講を奨め、主体的に学び課題を解決する力をつける研修プログラムを充実しました。 校種間や地域間の人事異動を増やすとともに、他県の学校や東京事務所で大都市の先端教育を情報収集するなど、行政分野に若手教員１６名を派遣しました。 教育研究所の集合研修を縮小し、通信型研修（８４０人受講）や、学校への訪問研修（５６０件実施）など、教員が受講しやすい研修体系に見直しました。 （主体的に通信研修等に取り組む教員数　３，６０４人）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
〇教員の授業力の向上 ・校長、教頭を中心に若手教員の授業力を高めるとともに、教員の自主的に勉強を進めるグループ活動を活発にして、学習指導プランの改善や授業力の向上を図ります。 ・高校教員が協力して過去の大学入試問題の模範解答例を作成するなど大学進学指導力の向上に努めます。 ・授業名人が協力して、より効果的な授業の進め方を研究するとともに、模範となる授業を昨年に引き続きＤＶＤにまとめ、若手教員等の授業力の向上に活用します。 ・指導力の優れた教員ＯＢの協力を得て、学校を訪問して教員の指導力を高める仕組みを整備します。 ・すべての高校で、各教科ごとの授業の進め方や難易度などに関する生徒による「授業わかる度調査」を実施し、課題を分析して授業改善を図ります。 ・ＩＣＴ機能を活用して、よりわかりやすい授業に改善していくため、スマート教育推進校を定め、教育研究所等と協力してデジタル教材や授業方法の開発を進めます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 福井の教育の強みを明らかにした県外派遣教員のグループや、実社会の生活に活かせる学習内容について研究を始めた数学教員のグループなど、自主研究３３５グループが、活発な研究活動を行いました。 東大、京大や福井大など１１大学の「個別大学入試対策学習アドバイス集」を作成するとともに、「高校生受験応援サイト」に掲載し、大学進学指導を充実しました。 若手教員の授業力向上を進めるため、各高校に「若手教員授業力向上塾」を設け、授業名人や指導力のある教員が指導・助言を行いました。 授業名人等の模範授業をＤＶＤに編集・配付し、各学校における授業研究会や初任者研修等で活用しました。 生徒指導力のある教員ＯＢが若手教員とチームティーチングで授業を実施する仕組みを整備しました。 各県立高校において、すべての生徒に対して「授業わかる度調査」を実施し、調査結果に基づき、グループ学習の工夫等に取り組むなど、理解しやすい授業への改善を進めました。 スマート教育を推進する１１県立校にタブレット等を導入して、家庭学習と授業との接続を改善するなど、ＩＣＴ機能を活用した新しい授業の研究を始めました。
教員の自主的な勉強のためのグループ活動件数　１，０００件 （平成２５年度　９１７件） 学習指導プランの登録数 小学校２，８００件、中学校１，３００件 高校　７００件 （平成２５年度 小学校２，６８１件、中学校１，２０２件 高校　６１４件） 生徒から見た授業のわかる度指数 （授業満足度）　７６％ （平成２５年度 第１回７３．３％　第２回７５．３％）	教員の自主的な勉強のためのグループ活動件数 １，００９件 （小学校３９２件、中学校３８７件、高校２３０件） 学習指導プランの登録数 小学校３，３７３件、中学校１，３５８件、高校７１０件 生徒から見た授業のわかる度指数（授業満足度） 第１回　７６．０％　第２回　７７．２％

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○少人数教育の推進と学校規模の適正化 ・今年４月から２年間で、小学３年生および４年生における３６人以上の学級を解消し、全国をリードする本県独自の少人数教育を前進させます。 ・小中学校において、児童生徒がたくさんの友達と学び合う教育環境を整えるため、市町が主体的に児童生徒１００人以下の小中学校の再編を進めるよう、支援を充実して学校規模の適正化を促進します。	〔成果等〕　目標を達成しました。 平成２６年４月から、小学３年生を３５人学級編成とするとともに、平成２７年４月からの小学４年生の３５人学級編制に向けた準備を進めるなど、本県独自の少人数学級を実現しました。 各市町における小・中学校の適正規模化を促し、美浜町では平成２７年４月に小学校７校を３校に再編します。 また、国が１月に、小・中学校の学校規模適正化の手引を示したことを受け、市町教育委員会と、統合や教育環境の整備について協議を進めています。
◇　日本の教育センター福井 **○福井の教育の全国発信と福井で学ぶ仕組みを充実** ・大学研究者等と共同で、学力・体力がトップクラスであることを学術的に解明する本を夏ごろに出版します。 ・本県の優れた教育内容を紹介するＤＶＤを他県の教育機関に配付するとともに、秋ごろに全国の教育関係者を集めた「福井教育サミット」の開催するほか、県外で本県教育の良さをアピールする機会を増やし、本県の教育力を全国に発信します。 ・全国からの教員を積極的に受け入れ、本県の学校現場で学べるよう、ホームページ等での情報発信を強化するとともに、県外へ出向いて講演等も行い、日本の教育センターとしての機能を高めます。 （県外教員の本県学校における研修等参加者数　９００人 （平成２５年度　８８３人））	〔成果等〕　目標を上回って達成しました。 福井の高い教育力を明らかにするため、大阪大学の研究グループによる１００日以上の学校現場での調査活動に協力し、１０月に新書「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」を発刊することにつなげました。 福井の教育を紹介するＤＶＤ「福井型１８年教育　次のステージへ」を全県の教育機関に配布するとともに、県外からの視察の受入れや県外での出前講演についてホームページで紹介しました。 １０月には、全国から７００名以上の教育関係者が参加した「福井教育フォーラム」を開催し、講演やシンポジウムのほか、授業名人による公開授業を行い、県内外の教員が広く議論する機会にしました。 県外の教育関係者２，０００名以上が視察に訪れ、授業方法などについて本県教員と意見交換を行いました。また、高知県や茨城県など６県からは、８名の教員が本県の学校現場で１年間の研修を行いました。さらに、国立教育政策研究所において出前講演を行うなど、延べ４２名の教員が、県外に出向いて教育講演を実施しました。 （県外教員の本県学校における研修等参加者数　１，３４８人）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○嶺南・嶺北の交流促進と青少年体験活動の充実【部局連携】 ・舞鶴若狭自動車道の全線開通を契機として、嶺北の学校が嶺南地域を訪れ、年縞をはじめ、三方五湖などの自然や若狭の伝統文化を学ぶための学校活動を支援します。 ・芦原青年の家について、北潟湖等の豊かな自然を活用する体験プログラムの開発改良を進めるとともに、平成２８年度の開館に向けて新たな施設整備を着実に進めます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 嶺南訪問の経験のなかった嶺北の小学校１６校の４、５年生５８０名が、三方五湖の自然環境や、魚さばきや塗り箸作り等の若狭の食文化について体験を通して学びました。また、観光営業部と連携して、「若狭路恐竜博」や嶺南地域における体験学習プログラムへの参加を呼びかけ、延べ３０，０００人の児童生徒が嶺南地域を訪れました。 芦原青年の家においては、北潟湖等の地域資源を活用した体験学習プログラムの開発を進め、３６６人が参加しました。 新たな施設整備については、土地造成工事を３月までに概ね完了し、平成２７年度４月から建物工事に着手します。
○いじめも不登校も体罰もない学習環境の推進 ・「いじめ防止基本方針」に基づき、「思いやりや助け合いの心を持って行動できる」子どもを育てる教育を行い、いじめのない学校づくりを進めるとともに、いじめの早期発見に努め、「いじめ対応サポート班」による早期解消を図るなど、学校・家庭・地域が一体となったいじめ対策を進めます。 ・全ての小・中学校が参加する不登校対策研修会を定期的に開催することなどにより、不登校の未然防止や迅速な初期対応に努め、不登校を減らします。 ・校長や教頭が、生徒等から定期的に聴き取りを行うなど、体罰のない部活動、生徒指導を徹底します。 （不登校者数 小学校７５名、中学校３９０名 （平成２５年度 小学校７９名、中学校３９８名））	〔成果等〕　目標を達成しました。 「福井県いじめ防止基本方針」に基づき、学校、ＰＴＡ、子ども会、スクールカウンセラー等と一体となって、「いじめ問題対策連絡協議会」を設置し、いじめを未然に防止するための取組みを進め、児童生徒のスマートフォン等の使用に関する全県的な対策を進めています。また、「いじめ調査専門委員会」を設置して、重大事態が生じた場合の調査体制を整えました。 すべての学校で「学校いじめ防止基本方針」を作成し、「いじめ対策委員会」で、いじめを防止する方策を協議しました。また、児童生徒によるいじめの自己チェック等により、早期発見に努めるとともに、「いじめ対応サポート班」を組織して早期解消を図りました。 小・中学校の管理職を対象として７月と１月に学識経験者による研修会を開催するとともに、欠席が５日以上の児童生徒については、「状況シート」により欠席の理由や家庭での状況等を把握し、教育相談担当教員やスクールカウンセラー等で構成する「支援チーム」を組織して担任を支えるなど、休み始めた児童生徒への初期対応を徹底しました。 校長や教頭が体罰について生徒からの聴き取りをするとともに、部活動の巡回を行い実態把握に努めました。また、教員への研修を行い、体罰の根絶に向けて取り組みました。 （不登校者数　小学校７４名　中学校３８６名）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○特別支援教育の推進【部局連携】 ・新たに４月から配置するジョブコーチがサポートして企業実習や求人開拓などを行い、発達障害など特別な支援を必要とする生徒の就労支援を充実します。 ・就学前の保護者への理解普及を図るとともに、「移行支援ガイドライン」に基づき、小・中・高の移行期の連携体制を充実して、発達障害のある児童生徒が円滑に学校生活が送れるよう、支援します。 ・特別支援学校の児童生徒と地元学校の児童生徒が共同して学習や作業に取り組むことを支援し、地域で育む特別支援教育を推進します。	〔成果等〕　目標を達成しました。 特別な支援を必要とし一般就労を希望する生徒に対して、ジョブコーチ３名を配置し、企業での実習サポートや求人開拓を行った結果、実習を受けた２６名のうち２３名が一般就労しました。 発達障害等への理解や早期に支援の必要性を促すため、すべての５歳児保護者にリーフレットを配布するとともに、県内６か所で研修会を開催し、３０３名の方が参加しました。 「移行支援ガイドライン」に基づく幼稚園、保育所から小中高の各教育現場で切れ目ない支援や指導方法等について教員、保育士など６５１名に研修を行い、落ち着いて授業を受けるための児童独自のルールが進学先でも引き継がれるなど、円滑な学校生活を送るための取組みを進めました。 特別支援学校の児童生徒１０８名が、住まいのある小中学校での交流を行ったほか、高等部の生徒に対して、障害の程度に応じて、地元高校と共同での作業学習を県内３地域（奥越：パン製造販売、嶺南：鯖へしこ加工販売、福井：ビルの清掃）で進めました。

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
２　新しい方向をひらく農林水産業 ◇　食卓に「福井の食」（地産地消、地産外商） 〇毎日おいしい地場産給食の実現 【部局連携】 ・新たに国のスーパー食育スクールの指定を受け、嶺北と嶺南の小学校が協力して、自然環境・生活環境が異なる地域の食文化に触れ、理解を深める教育を行うほか、家庭・地域における子どもたちの適切な食事の取り方の指導に力を入れるなど、栄養教諭を中心とした食育活動を強化します。 ・県内全小学校で、家庭科の調理実習時にこんぶ等を使ったダシのとり方を学ぶことにより、伝承料理など和食文化の理解を深めます。 ・栄養教諭が料理長等の協力を得て、地場産食材を使った和食給食のメニューを開発するほか、８月に学校給食調理コンテストを開催し、児童生徒の地場産食材や和食文化などへの理解を深めます。 ・食育の祖、石塚左玄が唱えた「一物全体食」の考えを基に、魚の頭や野菜の葉などを残さず食べる「丸ごと給食」を実施します。 ・１１月の「ふくい味の週間」などを中心に、地場産食材を使用した給食を保護者や地域の方にも味わってもらいます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 鯖江市河和田小学校と高浜町青郷小学校が、スーパー食育スクールとして郷土料理を教えあう交流活動を行い、地元食材の知識を深め、郷土料理を食べることやつくることへの関心を高めました。 家庭科の調理実習時において、県内全小学５年生が、栄養教諭等から、こんぶ等を使ったおいしいダシのとり方を学びました。 栄養教諭が料理長等の協力を得て、「鯖の塩麹味噌漬け焼き」など地場産食材を活用した給食献立（１０献立）を開発し、「学校給食調理コンテスト」（８月）の献立等をレシピ集にまとめ県内外に発信しました。 甘エビなど地場産食材を活用した「丸ごと給食」を給食で提供したほか、「ふるさと逸品フェスタ」（１１月）、県庁食堂（１月）、「ふるさと料理を楽しむ会」（２月）で、若狭牛や鯖などの地場産物を活用した給食メニューを紹介しました。

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
３　国体めざす県民スポーツ、生活のなかに楽しむ県民文化 ◇　飛躍する福井のスポーツ 〇スポーツ競技力の向上 ・平成３０年の「福井しあわせ元気国体」に向けて、今年、長崎で開催される国体での１０位台を確保するとともに、オリンピック経験者などトップレベルの指導者から直接指導を受ける機会を充実することや、高校の重点強化校等に優秀な強化コーチを配置することを進め、競技力のレベルアップを図ります。 ・日本代表などへの指導実績を持つ優秀な専門トレーナーを招き、体力・心理面の強化を行い、常にベストなコンディションで試合に臨める選手を育成します。 ・本県ゆかりのトップアスリートが県内を拠点に、競技選手や指導者として活躍できるよう、競技団体や県内企業などと一体となって支援を強化します。 （国体総合成績　１０位台 （平成２５年度　２４位））	〔成果等〕　目標を達成しました。 オリンピック選手などを育てた実績のあるスーパーアドバイザー４９名を派遣し、２５９回の実戦指導を行うとともに、勝山高校バドミントン部や足羽高校レスリング部などに強化コーチを配置し、指導を行いました。 強化合宿や国体会場でメンタル、フィジカル、栄養等で選手をサポートする専門的知識を有するトレーナーを１３０回派遣し、大会での好成績につなげ、長崎国体で、１４競技８２名が入賞し、男女総合１７位となりました。 福井国体で上位入賞できる選手を確保するため、Ｕ・Ｉターン選手の県内就職を支援する「スポジョブふくい」を立ち上げ、今年４月から、２６競技４８名が、県内企業等に就職し、県内でスポーツ活動を始めます。 （国体総合成績　１７位）
〇１県民１スポーツの推進【部局連携】 ・体力日本一の子どもたちに運動する習慣が身に付くよう、小学生には昼休みや放課後に楽しみながら運動や遊びを体験する機会を増やし、中学校においては国体種目を取り入れたスポーツ活動を充実します。 ・冬季でも行えるスティックリングなどのレクリエーションスポーツの体験会を開催し、年間を通じて、子どもから高齢者・障害者まで多くの人がスポーツに親しめる機会を提供します。 （県民のスポーツ実施率（週１回以上）　５０％ （平成２４年度　３６．８％））	〔成果等〕　目標を達成しました。 全小学校で、放課後等にニュースポーツや伝承遊び等で、１日１時間以上、からだを動かす活動を行うほか、小学校５０校にレクリエーション指導者などを派遣し、リズムダンス、フライングディスクやゴム跳びなどの伝承遊びを楽しく体験させ、休み時間にも意欲的に遊ぶ姿が見られるようになりました。 中学校で、国体競技種目の体験教室を実施し、ライフル射撃やフェンシングなど、国体競技の理解を深めました。 企業の担当者等を対象とした親子や仕事場で活用できる研修会を開催（５回）したほか、地域のスポーツクラブ指導者を対象に、初心者への指導法等の研修会を開催（３０回）するとともに、「親子スポーツ体験フェスタ」（６月）、「福井しあわせ元気スポーツフェスタ」（１２月）、「冬季ファミリー体験フェスタ」（２月）を開催し、県民のスポーツ参加を促進しました。 （県民のスポーツ実施率（週１回以上）　５０．１　％）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○県有体育施設等の整備【部局連携】 ・国体のメイン会場となる福井運動公園の県営体育館や陸上競技場をはじめ、漕艇場やクレー射撃場など県有体育施設について、平成２８年度から順次、使用できるよう改修工事を計画どおり着実に進め、選手の実戦力強化や県民のスポーツ促進を図ります。	〔成果等〕　目標を達成しました。 国体の開会式会場にもなる福井運動公園の陸上競技場は、夜間照明の設置が完了し、平成２７年度末の完成を目指して、改修工事を進めます。 屋内水泳場は、新施設の基礎工事がほぼ終了し、県営体育館は、３月から新体育館の建設工事を始め、野球場メインスタンド改修工事も着手します。 県立漕艇場は既に改修が完了しており、馬術競技場の改修、クレー射撃場の環境対策工事のほか、平成２７年度からはライフル射撃場の建設工事に着手し、国体会場で本県選手が十分練習できるよう、早期完成を目指します。
◇　生活に福井の文化 **○国宝・重要文化財、県文化財の指定の拡充・推進【部局連携】** ・国の重要文化財指定に向けて、県内の優れた「祭り・行事」や「史跡・名勝」等の調査を進めるほか、「越前焼」や「漆器」など本県に伝わる伝統的工芸や民俗技術の指定文化財を増やし、県民の宝である文化財の保存や活用を図ります。 （国宝・重要文化財・県指定文化財の新規指定件数　９件 （平成２１年～２５年度の平均　８．８件／年））	〔成果等〕　目標を達成しました。 「福井県林・藤島遺跡出土品（福井市：勾玉等）」が重要文化財に、三田村氏庭園（越前市）が国の名勝に指定され、「絹本著色阿弥陀三尊来迎図」他８件を県指定文化財として指定するとともに、「神子の正月行事（若狭町）」、「みやあげ（敦賀市）」など県内の主要な「祭り・行事」に関する調査を実施しました。 「若狭さとうみハイウェイ」の全線開通を記念し、ふくい文化財体験月間には、リーフレット等を通して、高速道路等周辺の文化財、伝統行事を重点的に紹介しました。 （国宝・重要文化財・県指定文化財の新規指定件数　１０件）

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
○「福井ふるさと文学館（仮称）」整備推進 ・本県ゆかりの作家に関する直筆原稿等や、映像や音声など作家の実像に触れ、親しむことのできる資料の収集を行うとともに、展示工事を着実に進め、平成２７年２月に「福井ふるさと文学館（仮称）」を開館します。 ・文学講演会や文芸講座等の実施により、若い世代が文学に親しみ、創作活動に参加する機会を提供し、文学への関心を高めます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 ２月１日に「福井県ふるさと文学館」を開館し、開館記念行事として、特別館長の津村節子氏と藤田宜永氏の対談などを実施するほか、本県ゆかりの作家に関する直筆原稿、映像・音声など作家の実像に触れ、親しむことのできる貴重資料の展示を行いました。 また、平岩弓枝氏をはじめ全国で活躍中の作家等による講演会などを行うほか、桂美人氏など若手作家と直接話し合える文学サロン（２回）等の企画や、高校生ビブリオバトルなどを実施しました。
○こども歴史文化館の拡充推進 ・子どもたちが郷土の先人の業績を、より広く深く知ることができるよう、実物資料の収集を進めるとともに、すでに収集した奇術関連資料、蓄音機などの展示充実のための方策を検討します。 ・タイムリーな企画展示やワークショップ・体験教室を積極的に開催し、子どもたちが体験しながら、福井の歴史・文化を理解できる機会を充実します。 こども歴史文化館の来館者数 ５２，０００人 （平成２５年度　５１，７５３人）	〔成果等〕　目標を達成しました。 本県出身の南部陽一郎博士等との関連から星にスポットをあてた「ソラの星」展や、福井の先人である杉田玄白等が関わった『解体新書』発刊２４０年を記念した「翻訳のチカラ」展などを開催し、収集した隕石や「解体新書」などの実物を数多く展示するとともに、福井出身の企業家から寄贈を受けた初期の蓄音機によるコンサート等を開催し、子どもたちの興味・関心を高めました。 また、県内全域で小学校を対象にした出前教室を開催するとともに、常設展示を紹介する漢字あそびや、先人の業績を紹介する紙芝居等を実施しました。 こども歴史文化館の来館者数　５３，２５９人

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
４　すぐれた医療と支えあいの福祉 ◇　「こころとからだの健康」づくり 〇子どもの目と歯の健康づくりの推進 【部局連携】 ・近視予防のため、全ての小・中学校で、野外での活動や休み時間に遠くを眺める活動を充実するほか、学校と家庭が一緒になって、近視予防につながる規則正しい生活の定着を図ります。 ・むし歯予防のため、全ての小学校で永久歯に生えかわる時期となる小学４年生までを対象とした歯みがき教室を実施し、正しい歯みがき習慣の定着を図ります。 （むし歯のない小学生の割合　３８％ （平成２５年度　３６．３％））	〔成果等〕　目標にはいたりませんでした。 全小中学校で目を休める「リフレッシュタイム」の設定や、「目の愛護デー」（１０月）に合わせた保健指導を行い、小学１、２年生（９月）、小学校入学予定児（１１月）に対し、正しい姿勢やテレビ視聴のきまりなど、目を大切にする生活チェックを行う健康カードを配布し、近視を予防する生活習慣の定着を図りました。 全小学１～４年生を対象とした歯垢染色剤を用いた歯みがき教室や、１、２年生保護者への正しい歯みがき習慣の定着を図るためのリーフレットの配布を行うほか、小学５・６年生を対象に「歯みがき名人」(1,129 人)を認定し、正しいブラッシングの普及を図りましたが、更に、予防歯科の知識と関心を高めるため、家庭への啓発活動や、養護教諭・担任による子どもへの歯の健康を守るための知識や意欲を高めるための指導を充実します。 （むし歯のない小学生の割合　３７．５％）
５　若者のチャレンジと女性の活躍を応援 ◇　子どもがたくさん、家族を応援 〇「放課後子どもクラブ」への支援 ・希望するすべての小学生が放課後子どもクラブを利用でき、安心して放課後を過ごすことができるよう、県独自の支援を引き続き実施し、市町における放課後子どもクラブの拡充を促します。 ・指導者に対して、安全管理、生活指導、遊び指導等に関する研修を充実して、放課後子どもクラブの活動を向上させます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 「放課後児童クラブ」と「放課後子ども教室」の運営を一体的に進めた結果、県内３８０箇所の「放課後子どもクラブ」において、子どもたちが文化活動や読書・宿題等を行うことができる活動場所を確保し、希望する子どもたちをすべて受け入れることができました。 また、指導者に対して子どもとの接し方や遊び指導に関する研修会（２回）を実施し、放課後子どもクラブでの活動内容の充実を図りました。 平成２７年度からの子ども・子育て支援新制度の開始に備え、県内３市１３箇所の放課後児童クラブの整備を支援するとともに、県内の今後５年間の利用ニーズおよびその提供量を取りまとめた事業計画を策定し、小学６年生までの児童を受け入れる準備を整えました。

役職	教育長	氏名	林　雅則

項　目	実　施　結　果
６　日本一の安全・安心（治安向上から治安実感へ） ◇　治安実感プログラム ○通学路交通安全の推進 ・学校、道路管理者、警察が協力して、学期前や降雪期を中心に安全点検を実施し、見守り活動の強化や横断歩道の整備などの安全対策を進め、通学路の安全を確保します。 ・子どもたちが、自らの命を守る安全な行動ができるよう、道路を安全に横断する方法や自転車の正しい乗り方など、交通安全に関する正しい知識を深める交通安全教室を開催します。	〔成果等〕　目標を達成しました。 全市町において「通学路交通安全プログラム」を作成し、通学路の危険箇所や安全対策の進捗状況を確認する合同点検を実施（５～７月）するとともに、見守り活動の強化や安全マップの作成・配布、横断歩道の整備など安全対策を進めました。 ２月１０日の降雪時には、すべての小中学校の通学路の安全点検状況を調査し、車道の排雪により歩道が歩けないなどの危険箇所の対応を行いました。 ４～５月には全小中学校および県立学校において、子どもたちが道路の安全な横断方法や自転車の正しい乗り方を習得し、交通安全に関する正しい知識を深めるための交通安全教室を開催しました。
◇　地震・異常気象・災害などに迅速対応 ○防災教育の推進 ・本県独自に作成した「学校防災マニュアル」に基づき、児童生徒が、自らの命を自ら守る能力を身に付ける防災教育を行います。 ・気象や防災の知識を有する「学校防災アドバイザー」を派遣し、学校の防災体制の強化や避難訓練への助言を行い、教員と児童生徒の災害への対応力を高めます。	〔成果等〕　目標を達成しました。 地震や津波災害に対応した避難訓練や地震・津波のメカニズムなどを学ぶ防災教育の授業を行ったほか、７月に各学校の防災担当教員を対象とした「防災教室講習会」を開催（２８１名参加）し、学校における防災教育の充実を図りました。 気象台職員や防災士会からなる「学校防災アドバイザー」を学校（２０校）へ派遣し、防災マニュアルの点検、避難経路の安全確認、児童生徒への避難指導など学校における防災体制の整備を支援しました。 原子力発電所３０ｋｍ圏内のすべての公立学校（１４３校）が原子力災害時避難計画を作成（７月）するとともに、８月の原子力防災総合訓練の検証結果をもとに避難計画の見直しを行いました。
○子どもを守る耐震化の促進 ・児童生徒の学習の場、地域住民の避難場所となる学校施設の耐震化や、天井等の落下防止対策が必要な学校体育館等の改修を進め、災害時の安全・安心を確保します。 耐震化率 小・中学校施設（平成２６年度末） ９４％ （平成２５年度末　８９．８％） 県立学校施設（平成２６年度末） ９４％ （平成２５年度末　９３．１％）	〔成果等〕　目標を達成しました。 小・中学校施設について、県独自の補助制度や国の補正予算の活用により、計画を前倒しして耐震補強工事を進めました。 また、県立学校施設についても、計画的な耐震化を進め、平成２７年度中にすべての小中学校、県立学校施設の耐震化が完了します。 耐震化率 小・中学校施設　９５．２％ 県立学校施設　９５．０％